

# 私の病診連携

雨森医院 雨森正高

## I. はじめに

湖北病院創立百周年、誠におめでとうございます。何時の間にか私も 85 歳にもなり、気がつけば医師会で伊香病院時代の思い出をたどれるのは安井満喜子先生と愚生ぐらいになってしまいました。数多のご援助ご指導を戴いたことに感謝申し上げ、遙かな記憶を辿りつゝ駄文を書き連ねさせていただきます。

## II. 木造の伊香病院(～昭和 37 年)

### (1) 初めて病院へ

中学 2 年(昭和 19 年)の夏のある夜に母が急病になり、伊香病院で診て頂くことになった。母をリヤカーに乗せ、父が後から自転車の乾電池で照らす灯りを頼りに、小石の多い道を木之本の病院まで連れて行った。

天井から暗い裸電球が一つ垂れ下がっている病院の廊下で、母の布団の中に入れて行った『一二三年の英作文』を読みながら辻田広雄先生の診察が終るのを待った。「一晩このまゝ様子を見てみましょう」と云われて空のリヤカーを曳いて帰ることになった私に、診察の介助をされた速水婦長さんが「心配せんでもよろしいで」と声をかけてくださったことが、昨日のように思い出される。

余談ながら、その年の 11 月に父は召集令状が来て、軍医予備員として京都藤ノ森の陸軍病院(現在の独立行政法人京都医療センター)に入隊した。辻田先生も召集されていて同じ部屋で約 1 ヶ月間寝食を共にして伝染病の予防医学の講義や軍事教練を受けたというご縁もあった。

速水婦長さんは助産婦の資格も持っておられ、長年伊香病院に勤められた功労者である。私の妻が長男を妊娠した時には、京都の病院でお産をする予定日の 1 ヶ月程前に婦長さんに診て頂いた。ところが骨盤位になっているということで、時間をかけて正常位に直して頂いた。そのお陰で予定通り無事に安産できた忘れられない思い出がある。

### (2) 畳の入院室

昭和 34 年頃、近所の主婦が全身浮腫と高度の蛋白尿で来られネフローゼ症候群と診断した。プレドニン錠を使い著効を得たが、薬量を減量していくとまた元の状態に戻り、この繰り返しのため入院させて頂いた時に初めて病院の病室を訪問した。

引き違いのガラス障子を開けると、三畳ほどの板間の部屋の壁寄りに畳が二畳並べて敷かれ、その壁ぎわの布団に患者さんは寝ておられた。院長先生や看護婦さんは一々上履きを脱いで畳に座って診察や看護をしておられるのかと驚いた。

### (3) 患家で対診して頂く

伊香病院の医師は北嶋精智院長(内科)と辻田広雄副院長(外科)の2人であった。午前中は外来、午後は往診をされていた。

当時は、救急車はなく、自家用車のある家もなかったので、風邪をひいた、熱が出た、腹が痛い等でも往診の依頼があった。患者の病気が長引くときや診断に迷ったときは、父に習い北嶋院長に対診をお願いして指導や指示を仰ぎ、場合によっては入院させて頂いた。

北嶋院長が、郡内を隈無く、ある時は鷺見・針川の剣を登り、またある時は土倉鉦山・金居原へ深雪を掻き分け、或いは風雪吹き荒ぶ中を大浦から小舟に身を托し菅浦へと往診に東奔西走されたという話は耳にしていたが、辻田副院長も在職20年の間に、毎年数回は針川、半明或いは中河内という奥地まで雪の中を流産や大怪我の往診に行かれたそうである。針川まで往診に行かれたある時は、重症の急性汎発性腹膜炎にて動かせぬため、病院まで運転手に手術器具を取りに帰ってもらい、患家で手術されたという。北嶋院長が応召中(昭和16年～21年)は、辻田先生が1人で病院を守られたようだ。

## Ⅲ. 伊香病院の新築と大樋院長の時代(昭和37年～39年)

### (1) 木造から鉄筋の病院へ

伊香病院の建物は、今も僻地に残る木造の校舎のような建物であった。終戦後に視察に来た進駐軍の女性看護官が“cottage”と驚いたそうである。地域住民は、人材も設備も整った地域の中核となる病院の建設を熱望していた。伊香郡の四町村長と町村会そして北嶋院長のご努力により、鉄筋三階建ての近代設備を持った本館が完成したのは、昭和37年3月であった。北嶋院長はその完成を見届けたうえ、後進に道を譲り勇退されたのである。

新病院の規模は、病床数70床、職員は大樋善信院長(外科)、大前典俊副院長(内科)、北小路博央(外科)、溝淵孝雄(内科)、米原孝彦(小児科)、鈴木文七(産婦人科)、巽(耳鼻科)の5科7名の医師を含め約50名であった。新館は冷房こそなかったが、木造旧病舎にはなかった暖房設備が備わった、当時としては立派な病院であった。

### (2) 先生のひと言

新病院開院の翌日であったと思う。放射冷却により厳しい冷込みの霜の早朝に小山村(現木之本町小山)の神社に男の人が倒れていると往診依頼を受けた。患者は社殿を改修に来た大工だという。呼びかけるも意識はなく、脈は触れないが、呼吸は保たれていた。冷たい地面に寝させたまゝが気になったが、取り敢えず注射をしていると(当時はまだ心臓マッサージ法は教えられていなかった)、かすかに瞬きをし脈が触れるようになった。ところが脈拍数が何と1分間30以下と高度の徐脈である。アダム・ストークス症候群だ!とアロテックの注射を打ち様子をみた。しばらくすると意識も回復して喋り始め、脈もよくなったので、戸板に乗せ、付き添って古橋の自宅まで運ばせた。然るのち、伊香病院に副院長内科部長として着任されたばかりの大前典俊先生に対診をお願いした。先生は午前中の診察時間にも拘らず直ぐに来てくださり、ひ

と通り診察を終えたのち、家族に向かってひと言、「先生の処置がよかったから助かったのですよ」と声をかけられ驚いた。この先生は開業医と患者のよい信頼関係を保たせて頂ける立派な先生だと尊敬した。

同じひと言でも「なぜもっと早く診せなかった。もう一日早ければ助かったのに」などと患者の前で病院の医師が前医を非難した記事が新聞を賑わしていた時代であったから、尚更私の心を捉え忘れられないひと言となったのである。

### (3) 38 の豪雪

昭和 38 年 1 月 12 日の午後 2 時頃、往診に出掛けた私は石道の患家へへ寄ろうとしたが、除雪はしておらず車は通れない。車のドアを開けると眼を開けていられぬほどの激しい降雪である。橋のたもとの店で唐傘を借り約百mの雪の積った坂道を駆け上り、診察をして駆け戻る僅か 15 分程の間に、車の半分が雪に埋もれていた。窓の雪を掻き落としキーを回すとワイパーは動いた。ギヤは LOW のままで走り続けた。途中、歩行の人に 3 人ほど出会ったが、深い雪の中へ避けて頂くのには感謝々々で走り続けた。対向車が来なかったのが幸い、辛うじて帰り着いたのであった。この雪はその後も止み間なく 1 週間降り続き、2 階に達する大雪となり、どの家も 1 月 31 日までほぼ孤立状態となった。

実はその日、北小路先生はもっと奥地から遭難一步の手前で奇跡的に生還されたとのことであった。その模様を先生の著書『わが勤務医時代の思い出』から引用しておく。

当時、岐阜県境の土倉鉦山には数百人の従業員がいて、週 2 回、伊香病院から出張診療をされていた。迎いのジープに乗って病院を出発した時には、空は一面鉛色の雪雲に覆われ肌を刺す寒風が吹き荒れていた。鉦山に着き診療を始めて間もなく、外は白一色の大雪となり、瞬く間に山や道を覆い尽くした。雪に慣れた職員が「先生、この雪じゃ早く帰っていただかんと今日はこゝで泊まって頂くことになりますよ」と早々に店じまいをしてジープの用意をしてくれた。さてと腰を上げようとした時、鉦山の入口の斜面で雪崩が発生。ブルドーザーを動員しての懸命の作業で道路は確保されたが、その数時間で積雪は 1m を超えた。やっと出発できたのが午後 4 時過ぎ。四輪駆動のジープのワイパーもきかない。ヘッドライトも用をなさない。一旦停まればスリップして立往生と、車の後部を左右に振りながらヨタヨタと山道を下りた。雪道に慣れた運転手も「これはひょっとすると車を置いて歩くことになりそうだね」と弱音を吐く。こんな真っ暗な山道をライトもなしに十数キロも歩けるものかと遮二無二車を進めること 4 時間、漸くにして病院に着いた時は午後 8 時を回っていた。大樋院長が雪の状態から帰路は危険と判断され、「今日はそちらで泊まるように…」と電話されたのが、ジープが出発した直後だったとか。正しく九死に一生を得た思いであったという。

## IV. 北小路院長の時代(昭和 39 年～43 年)

### (1) 北小路先生が院長に就任

昭和 39 年 3 月に大樋院長が退任され、大学から指名され北小路先生が院長に、大前

先生が副院長に決まり、金田悌二郎(外科)が赴任してこられた。

## (2) 病院の往診問題

伊香病院では、引き続き住民サービスとして事情が許す限り往診の依頼に応じておられたが、この温情が何時の間にか住民に濫用されるようになった。来院可能な患者までが往診を求め、病状から判断して来院を促すと「伊香郡民の病院のくせに何故往診しないのか」と筋違いの権利意識を振りかざすこともあった。目の離せぬ術後の患者を抱えて1人で夜の当直をしておられた北小路院長に、某有力者から往診依頼の電話がかかり、事情を説明しても仲々理解してもらえず、断るのに難儀された事例も起こり、病院組合の理事会で各町村向けに病院のかかり方を教育してもらうように依頼され、他の病院と同じように原則的に往診はされなくなったという。

## (3) 医局の大移動

昭和40年に大前副院長、内科の溝淵先生、婦人科の鈴木先生、外科の金田先生が相次いで開業或いは転勤のため退職された。後任の中井公侃副院長(内科)、久保大次郎(外科)、今村久郎(産婦人科)が赴任して来られた。私と同年か1、2歳下であり、大変親しくして頂いた。

# V. 東院長の時代(昭和43年～47年)

## (1) よく働きよく遊べ

北小路院長がこの地の人々に惜しまれながら退職されたのは昭和43年であった。それに伴い、確か大学の外科の助教授であった東平介先生が院長として赴任された。学識経験ともに優れ、豪快磊落にして細かいところにも気がつく方であった。大学では野球部の部長もされていたスポーツマンであった。中井先生には、レントゲンフィルムを診て頂くばかりでなく、胃透視を見学させて頂いたこともあった。その数年前からゴルフを始めていた私は、ゲーリー・プレイヤーの入門書を持って先生にゴルフを勧めてみた。二、三日後に新調の用具一式とゴルフアーススタイルで「練習に行きませんか」と現われたのには驚いた。それからしばらくは、週に3日は午後になると「練習に行きましょう」と追いたてられ付き合ったが、病院の先生はそんなに暇なのかなと羨ましく思ったほどである。

東院長のゴルフ好きは有名で、審査会に大津へ行かれたら「瀬田のゴルフ練習場へ電話を掛けた方が早く通じる」との噂さえ耳にした。湖北医師会や伊香郡医師会のゴルフコンペでは病院の先生方と和気藹々のお付き合いが出来たよき時代であった。

## (2) 病院訪問と患者訪問

京都の市内で開業しておられた林良材先生(京大内科の元助教授)が、私のインターン時代に『町医三十年』と『誤診百態』を相次いで出版された。私は、この二著を愛読し、大変啓発された。

内科に入局していたある日、同僚の1人が「林良材先生が診に来ておられるんだ。経過を説明してこなければ…」とカルテを抱えて走っていくのを目にした。紹介した

患者を訪ねる開業医の先生など一度もお目にかかることのなかった私は、深い感銘を受け、将来開業したら林先生を見習おうと心に決めたものである。

父の病気により研修半ばで開業したため、病院の先生から学び取りたいと考えていた私は、大前先生という願ってもない知己を得たことを喜び、午後の往診の後に病院の大前先生を訪ね、心電図や胃透視のレントゲン写真を見て頂いた。大前先生が退職されると後任の中井公侃先生に、更にその後任の山下滋夫先生へと、当然のように頻繁にお邪魔し、見落としがたいかを見て頂いた。どの先生も大変お忙しい先生ばかりであったが、「これだけでは噴門部や前壁は見落とす恐れがあるから、こんな体位も撮っておいた方がよい」とか「造影剤を変えたら前より綺麗にでるようになったよ」などとアドバイスを頂けた。長年に亘り授業料も払わずに厚かましいことであったが、教えを受け助けて頂いたことを心より感謝している。

かねてからの希望していたように、入院をお願いした患者さんを訪ねるようになったのはこの頃からだったと思う。最初は、「誰々さんのカルテを見せてください」と云ったら詰所の若い看護婦さんに「部外の方にカルテは見せられません」と断られた。しかし頻回に訪問するうちに詰所へ寄ると「今日はどなたのですか。ご苦労さま」とカルテと一緒にレントゲンのフィルムを出して、担当医の先生へも連絡して下さり、先生から経過や診断を聞かせるようになった。また、入院させて頂いた患者さんの手術は、出来るだけ見学させて頂くようにして勉強させて頂いた。こうして病院の先生方と親しくなったばかりでなく看護婦さんや職員の方とも顔見知りになった。レントゲンのフィルムを現像している時間が無く、カセットのまま病院へ持って行き技師さんに現像をお願いしたこともあった。

### (3) 病院へ往診！

病院の休日当直医がまだ1人であった頃のある日曜日に婦長さんから電話が掛かってきた。入院中の患者さんが脳卒中を起こされたが、パートで来ている当直の耳鼻科の先生が診て下さらない。病院の先生方へ電話しているが、どなたとも連絡がとれないので、来て頂けないかと依頼された。病院へ入院中の患者さんを開業医の青二才が診るなんてとんでもないと思ったが、患者さんや家族の方の不安を察し、また病院のことも考えて、治療は兎も角、診察だけはさせて頂こうと出掛けた。

患者さんは高齢の男性で、外科へ入院中であった。診察している内に「内科の先生に連絡がとれました」との報せがありほっとした。一応丁寧に診察させて頂いたが、片麻痺のみで意識障害はなく、幸いバイタルは安定していた。患者さんと付き添いのお婆さんは、やっと診察してもらえたと喜んでおられた。診察所見をカルテに記し署名して病院を後にした。

## VI. 医師団総辞職により病院閉鎖

この時代の伊香病院の先生方は、伊香郡医師会の旅行にもゴルフにも参加して下さり、とても和やかな交流が行われていた。そのような中、昭和47年3月のある日、医師団総引き揚げの話を突然に聞かされた。下々の私達には全く寝耳に水で、送別の小宴を開いたとき、中井先生が「何でこれが分ってもらえんのか」と涙をこぼされたが本当の

理由は分らぬままにお別れとなった。しかし先生とはそれからも親しく交流を続け、お亡くなりになった時には弔文を認めて送った。

今回、本文を記すに当り関係書類を探した処、「医師団の引き揚げとその後の歩み」と題して寺村信次元木之本町長が『新制滋賀県医師会二十五年のあゆみ』に寄稿しておられ、その後の経緯や交された申し合せ事項と共に、今村先生がひとり残り孤軍奮闘して頂いた事情について記されている。

## Ⅶ. 伊香病院の再開(昭和 47 年 8 月～56 年 3 月)

### (1) 伊香郡医療のレベルアップ

幸い数ヵ月後に大学と町村との間に和解が成立して、馬場道夫院長(内科)、今村久郎副院長(産・婦人科)、山下滋夫(内科)、桜井洋右(消化器)、浜本肇(循環器)、岡田勝弘(内科)、弘中武(外科)、福島正信(外科)、沖野功次(外科)、伊藤博之(整外)の医師 10 名でスタートした。

新しく赴任された馬場院長はバイタリティー溢れる指導者であった。病院の強化と充実を図るとともに伊香郡の医療レベルのアップを図るべく、院内学術集談会を診療所の医師にも開放され、学術談話会を兼ねた一泊旅行も提案された。このユニークな発想は、その後長い間、伊香郡医師会の恒例事業として取り上げられ、病院と診療所の間で嘗てない意志の疎通と友好関係が深まり、新しい医学の勉強や診療所のレベルアップにつながった。

### (2) 手遅れの癌患者を助けて頂いた

私がうっかりして手遅れにしたと思った患者さんを、弘中先生に手術をして頂き助けて頂いた忘れられない思い出がある。

症例 1. 49 歳、村の女性。胃の具合が悪いとの訴えで来診され 3 週間程経ったある日、診察していた父が「ツモルが触れるよ」と私に囁いた。父の云う右下腹部を触診した処、鶏卵大の硬い腫瘍であった。それまで数回は来診しておられたのに、何という迂闊。直ぐ弘中先生に紹介し、回盲部の癌腫を摘除して頂いた(昭和 52 年)。それから毎年フォローして頂いたが再発も転移もなかった。二十数年を経過した頃、先生は舞鶴赤十字病院長として栄転された。彼女はその後来診する度に「弘中先生から体の調子はどうですかと今年も年賀状を戴いた」と嬉しそうに報告してくれるのであった。偉い先生は為さることが違うと感服している次第である。その彼女も 37 年目を越えた昨年、膵臓癌により亡くなられた。86 歳であった。

症例 2. 69 歳、隣家の女性。胃透視によりニッシュェを発見。胃潰瘍と診断して当時の治療法であったソルコセリル注射を 1 ヶ月間連用の上、再度胃透視を行った処、ニッシュェは縮小していた。当時は開業医の胃透視の回数やフィルム枚数の審査が厳しかったため、内服剤のみで経過を見て、更に 2 ヶ月後に胃透視を行った。どれほどよくなっているかと期待しながら 3 回目の透視を始め

た途端、われとわが眼を疑った。そこには細くくびれた砂時計胃が写っていたのである。愕然としながら家族に病院で診て頂くように伝え、弘中先生へ紹介状を認め、胃の全摘出をして頂いた（昭和 55 年）。

老婆は、退院後、先生の教えをよく守り、毎日 4 回、決まった時間に粥食をとった。食事が終ると手押し車を押し、雨の日も雪の日も同じ時刻に私の家の前を通り、村の中を一周されるのが日課となった。そして再発も転移も起こさず、12 年以上元気に過ごされ、最期は急性心不全により平成 5 年に急逝された。82 歳であった。

彼女等は「弘中先生には足を向けて寝られない」と何時も云っていたが、私も同じ思いで先生に感謝している。

## Ⅷ. 公立湖北総合病院の誕生(昭和 56 年)

### (1) 新築移転、病院名の改称

伊香病院は、木之本地蔵前の本通りから東へ狭い道を入った、現在の木之本中学校の所にあった。救急車や自家用車の通行が困難であり、駐車場も狭く、CT などの検査室を拡張する敷地の余地もなかった。

兼々、滋賀県の南北格差の解消に心を痛めておられた馬場院長は、伊香四町村長や町村会や県に新しく用地買収と病院の新設の必要性を早くから訴えてこられた。

昭和 56 年には、木之本 I C 近くの田園を買収し、最新鋭の診療検査器械を新調完備した地域の中核病院に相応しい立派な大病院を新築された。それと同時に病院の名称も伊香病院から公立湖北総合病院と改称された。診療科目は内科、神経内科、呼吸器科、消化器科、循環器科、外科、肛門科、整形外科、形成外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産科、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、気管食道科、理学診療科、放射線科、歯科の 20 科目で病床数は一般 200 床、結核 10 床、伝染 10 床の計 220 床である。更に国より僻地中核病院の指定と救急指定も受け、二次病院としての機能の充実を図られた。

### (2) 病診連携の強化

馬場院長は「この病院は開業医や診療所のお陰でやっていけるので、どうぞ白衣を着てどんどん病院に来てください」と伊香郡医師会誰それという胸の名札まで作ってくださり、若い頃に夢見た通り自分の病院のように病院内を闊歩できるようになった。

更に病院内では診療所から紹介された患者には返事洩れが無いように指示されたり、学会の発表に共同研究者として、病院へ紹介した医師の名前を加えたり、診療所の医師にも県医学会やその他の研究会に研究発表の機会を与えるなど細かい配慮をして頂いた。私達開業医が滋賀医学会で発表する場合には、紹介患者のカルテの写しやスライドを作り、発表の予行練習を行って助言をして下さった。

また、県下に先駆けて山下副院長と西浅井町国保直営診療所の前田昌彦先生の協力により作って頂いた病院への紹介や検査依頼の三部複写の依頼状は、現在も診療情報提供書となり活用されている。

(3) 山下滋夫院長(平成6年)と伊香郡広域総合保健医療福祉センターの竣工(平成7年)  
湖北の高齢化率が急速に上がる中、その対応として平成元年には老人保健施設「やすらぎの里」を病院の5階に増築、併設され、山下副院長が施設長に就任された。

平成6年には馬場院長の伊香郡病院組合助役就任に伴い、後任に山下先生が院長に就任された。

平成7年には老人福祉法の改正に伴い、病院の北隣に用地を拡張し、特別養護老人ホーム「伊香の里」、ショート・ミドルステイ、デイサービスセンター、老人介護支援センター、「ケアハウス伊香」の5施設からなる「伊香郡広域総合保健医療福祉センター」が竣工された。

一方、伊香郡医師会では、県下でも最も高齢化の進む中、在宅寝たきり患者の保健・医療・福祉の連携について、国より依頼事業を受け、地域医師会員、病院の医師、保健所、四町村保健福祉課、保健婦、老人保健施設、特別養護老人ホーム、在宅介護支援センター及び住民を対象に下記の事業に病診連携で取り組んだ。

◎要援護老人地域支援対策推進会議(平成元年度より5年度まで毎年開催)

◎伊香郡在宅医療総合懇談会(平成6年度)

◎伊香郡高齢者保健・医療・福祉・地域連携事業(平成7・8・9年度)

① 在宅寝たきり患者の実態調査

② 伊香郡高齢者保健・医療・福祉を考えるつどい開催(2回)

③ 研修会(抄読会2回)

④ 伊香郡高齢者保健・医療・福祉連携推進会議委員会(5回)、連携対策会議(5回)

⑤ 伊香郡高齢者保健・医療・福祉連携会議(5回)

講演会運営委員会(2回)

啓発パンフレット(郡内全戸配布)

在宅ふれあいノート(カルテ)作成

伊香郡在宅ケア・シンポジウム開催

シンポジウムとパネルディスカッション

## Ⅸ. 私自身及び家族がご厄介になった症例

### (1) 巨大水腎症(私自身)

次男の正記が湖北総合病院に研修医として勤めていた昭和62年の大晦日に、母が上腹痛を起こした。長男正洋が診察し、弟が休日当直をしているので病院で腹部エコーをさせてもらうことにして連れて行った。母は異常なしと器具を片付けかけたが、正洋が私の検査もしておいたらと勧めたので、ベッドに横になった。ところが左腎が大きな水腎症になっているという。自覚症状がなく、57歳という年齢から尿管の悪性病変が疑われたが、左腎摘除の結果は、先天性の腎盂尿管移行部狭窄症という診断であった。馬場院長の特別の計らいにより、正記に当院の午前中の診療を許可して頂いたお陰で、自院のことを何ら案ずることなく入院生活に専念させて頂けた。深い温情に心より感謝している次第である。なお正記は湖北総合病院に奉職中の2年間に、この症例報告を含め約15題の論文等を作成出来たようである。

## (2) 母の病理解剖

平成3年12月31日に母は脳梗塞を発病した。半月以上昏睡がつづき、右片麻痺、発語障害のため湖北総合病院の大谷理学療法士に往診をしていただいた。寝たきりとなり、嚥下障害のため衰弱し、4月30日に亡くなった。

正洋の勧めにより、馬場院長へ病理解剖を申し出た処、滋賀医大病理学教室の九嶋亮治教授の執刀により、病理解剖をして頂いた。

病理解剖学的診断： A. 脳梗塞（癥痕）  
左内頸動脈（特に左中大脳動脈領域）  
B. I. 出血性胃潰瘍  
II. 気管支肺炎  
C, I. 出血性素因  
II. 萎縮腎  
III. 膀胱結石  
〔心房内、内頸動脈内に血栓見られず〕

## (3) 父の頭部CT検査

平成8年9月20日の朝、トイレへ行く途中で倒れていた。呼吸障害はなく、脈拍は保たれているものの、眼は見え、発語は全く出来ぬ状態であったが、腕をかかえると立てるため、自家用車で湖北総合病院に参り、頭部CTを撮って頂き、左前頭葉の巨大脳出血と診断された。看護婦さんが「この方を連れて帰るのですか」と心配してくださったが、93歳という高齢であり、治る見込みは全くないと考え、家で最期まで看取るべく連れて帰った。そのまゝ意識は戻らず翌月8日に安らかに永眠した。両親とも病院には大変ご厄介をかけたが、在宅看取りを身をもって体験することができ、学ぶところ多大であった。心から感謝しております。

## X. 伊香郡医師会解散とブロンズ像『なかよしの樹』（平成14年3月31日）

伊香郡医師会は明治20年に滋賀県医会が結成された時に、伊香支部として結成されたようである。平成14年3月31日には東浅井郡医師会と長浜市坂田郡医師会と合併して湖北医師会へと発展・解散することとなり、115年の歴史の幕を閉じた。

その伝統ある伊香郡医師会の歴史と足跡をモニュメントとして遺すべく、湖北総合病院前のロータリーに設置して頂いたのが玉野勢三先生のブロンズ像『なかよしの樹』である。病院を訪れた人々が、帰りの玄関先にこの像を見て、ほっとした心の安らぎを感じて頂ければ幸いである。

## X I. あとがき

思えば医師としての大半を伊香病院から公立湖北総合病院、長浜市立湖北病院へと辿る病院の、歴代院長先生始め医局の諸先生に教えられ、研かれ、育てられ、助けられ、支えられ、或いは時には協力して頂き、実のある人生を送らせて頂きました。また職員の皆様には度々ご厄介を掛け、そして助けられて参りました。うっかりと手遅れにしてみましたと密かに案じながら紹介した患者さんまで、助けて頂く幸運にも恵まれました。また恰も自分の病院のように厚かましく気楽に訪問させて頂き、時には勝手なご無理や我儘を申し上げ、ご迷惑をおかけしました。その度ごとに温かく応対して下さいましたご親切は身に染みて有り難く感謝しております。自院から車で10分以内という近くにこういう病院があった幸せと創立百年という重みを感じつつ心より厚くお礼申し上げます。

名前も長浜市立湖北病院と変りましたが、エキスパートの優れた先生方が伝統ある病院を一生懸命に守って頂いていることは誠に心強く有り難いことでもあります。

今では愚息が後を継ぎまして厚かましく病院にお邪魔しておりますが、今後とも宜しくご指導を賜りますようお願い申し上げます。

長浜市立湖北病院の益々のご発展をお祈り申し上げ、創立者富田八郎氏の意を肝に銘じて地域医療の充実に寄与して頂きますようお願い申し上げます。

### 参考資料

1. 『滋賀県医師会七十年史』
2. 『新制滋賀県医師会二十五年のあゆみ』
3. 『滋賀県医師会百年誌』
4. 『伊香郡医師会報 1～16号』
5. 『わが勤務医時代の思い出』北小路博央著